

A (16)年度委託 (作物名 ぎゅうり)

対象病虫害名 うどんこ病

試験場名 (社)日本植物防疫協会研究所 担当者氏名 難波 孝志、重松 辰郎、小川 正、田代 定良

1. 試験目的 (依頼事項) 防除効果及び被害の検討
 2. 試験方法 試験地場所 茨城県牛久市結束町535 (社)日本植物防疫協会研究所内 ビニールハウス
 対象病虫害発生状況 中発生
 耕種概要(品種・施肥・一般管理) 品種:トップグリーン 播種:平成16年8月6日 定植:9月17日
 畝間(畝幅、条間):1.8m(1.2m、50cm×2条植) 株間:50cm
 施肥(10a当り):BM307(20) 70kg, 磷硝安加里S-604(16-10-14) 50kg
 その他管理は慣行に従った。

区制・面積 1区:6.3㎡ (1.8m×3.5m、14株) 3反復
 処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

平成16年10月6日より以下のスケジュールに従い、緑茶は2日間隔、対照剤は7日間隔で背負式全自動噴霧器を用い、10a当り170~200%の割合で散布した。

	10/6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	合計
緑茶	○		○		○		○		○		○		○	7回
対照	○							○						2回

調査月日・方法

10月20日(緑茶最終散布2日後)、22日(同4日後)、25日(同7日後)の3回、各区隣接区の影響を受けない12株を対象に、第4葉から上位12葉を以下の基準に従い、発病を程度別に調査し、発病葉率および次式より発病度を算出した。また、発病度より防除価を求めた。葉害は適宜肉眼で観察した。

$$\text{発病度} = \frac{\sum(\text{程度別発病葉数} \times \text{指数}) \times 100}{(\text{調査葉数} \times 5)}$$

指数: 0:無発病、0.5:僅かに発病を認める、1:病斑面積率5%未満、2:同5%以上25%未満、3:同25%以上50%未満、4:同50%以上、5:同75%以上

その他

緑茶は沸騰させたお湯に茶葉1g/1Lの割合で入れ、再加熱せずに15分間抽出し、濾過後、室温程度にさました後そのまま散布した。

緑茶: (煎茶) 原材料 茶 賞味期限 05.8.23 製造・販売

3. 試験成績

供試薬剤	希釈倍数	反復	10/20			10/22			10/25			薬害
			発病葉率	発病度	防除価	発病葉率	発病度	防除価	発病葉率	発病度	防除価	
緑茶 (抽出液)	原液	I	73.3	30.9		83.1	38.5		88.3	41.8		—
		II	66.9	31.4		78.3	39.7		95.8	46.5		—
		III	70.0	28.7		84.2	39.2		93.3	45.8		—
		平均	70.1	30.3	39.9	81.9	39.1	34.9	92.5	44.7	31.0	
モレスタン 水和剤 Lot. 06-10-4874N	3000倍	I	42.5	4.8		55.0	8.2		86.7	2.3		—
		II	35.0	4.7		34.2	4.8		37.5	5.1		—
		III	33.3	5.7		45.0	6.5		51.7	7.4		—
		平均	36.9	5.1	89.9	44.7	6.5	89.2	58.6	8.3	87.2	
無処理		I	78.3	46.4		88.2	57.2		95.0	60.7		
		II	86.7	57.5		95.0	70.2		100	69.4		
		III	82.5	47.3		88.3	52.8		98.3	64.3		
		平均	82.5	50.4		90.5	60.1		97.8	64.8		

対象病虫害名 うどんこ病

4. 考察

散布開始時は本葉11~12枚の作物ステージで、そのうち第5~6葉までに病斑が散見される状況であった。その後病斑は徐々に増加し、上位葉へと進展していき、散布開始から2週間後の第1回目調査時における無散布での発生は中発生状況となった。このような対象病害の発生状況の中、モレスタン水和剤は若干発病葉が目立ったが、防除価約90と高い防除効果が認められた。

○ 緑茶 (抽出液) 原液

本剤の原液、2日間隔、7回散布は対照のモレスタン水和剤、7日間隔、2回散布と比較し明らかに効果は劣ったものの、無散布と比較し程度はやや低いながらも防除効果は認められた。

無散布区での発病度が初回調査時(最終散布2日後)から2日後の第2回調査時までにおよそ10ポイント増加、第3回調査時では約15ポイント増加したのに対し、本剤散布区においても同様の増加傾向を示した。残効性は極めて短いものと考えられた。

本剤散布による薬害は観察されなかった。

対象病害虫名 うどんこ病

試験場名 社団法人 日本植物防疫協会研究所宮崎試験場

担当者氏名 本橋 恒樹、山岸 久芳

1. 試験目的(依頼事項) 防除効果および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂11913 社団法人 日本植物防疫協会研究所宮崎試験場

対象病害虫発生状況 試験開始日:初発生確認日、同7日後:極少発生、同14日後:少~中発生、同21日後:中発生

耕種概要(品種・施肥・一般管理)

品種:翠星節成2号(台木:ニュースーパー雲竜)、播種:平成16年11月8日(穂木)、定植:12月9日、施設栽培(2重張加温)

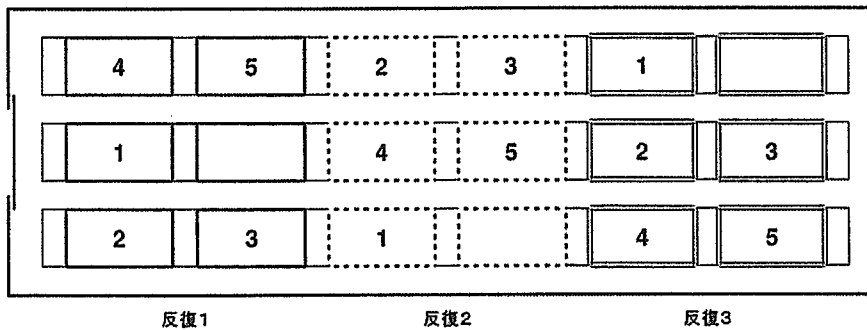
栽植距離:畝間 170cm(畝幅 110cm、2条植、条間 40cm)、株間 40cm

施肥:マンガンほう素有機入複合P888号(8-8-8) 90kg/10a、苦土入CDU複合燐加安特S222(12-12-12) 60kg/10a

その他管理は慣行に従った。

区制・面積 1区:4.1㎡ (2.4m×1.7m、12株) 3反復

試験区配置



- 1: 緑茶抽出液
- 2: 焼酎希釈液
- 3: モレスタン水和剤希釈液
- 4: カリグリーン水溶剤希釈液
- 5: 無散布

処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

被験物質 緑茶; 製品名: (煎茶)、原材料: 茶、賞味期限: 05.8.23、製造・販売元:

モレスタン水和剤; 有効成分及び量: キノキサリン系 25%、Lot. No.: 2435N、有効期限: 05.10

カリグリーン水溶剤; 有効成分及び量: 炭酸水素カリウム 80%、Lot. No.: 040110、有効期限: 08.10

被験物質希釈液調整 緑茶は、沸騰させ火から下ろした水道水1ℓに対して緑茶1gの割合で15分間抽出し、ガーゼで濾過し、流水程度まで冷却させた後、散布液として供試した。

対照薬剤は、外希釈にて調整した希釈液を供試した。この際、カリグリーン水溶剤希釈液には展着剤(マイロー)を10000倍希釈になるように添加した。

被験物質希釈液散布 緑茶抽出液は、平成16年12月16日(対象病害初発生確認日)、18日、20日、22日(無散布区発病程度:極少一少)、24日、26日、28日(少発生)、30日(少~中発生)、平成17年1月1日、3日(中発生)、5日の2日間隔で合計11回、背負式全自動噴霧器を用いて10aあたり150ℓから280ℓの割合で散布した。

対照薬剤希釈液は12月16日、23日(極少一少)、30日の7日間隔で合計3回、背負式全自動噴霧器を用いて10aあたり150ℓから240ℓの割合で散布した。

調査月日・方法

12月23日(試験開始7日後、極少発生、第2位~第6位本葉を調査)、30日(同14日後、少~中発生、第2位~第9位本葉を調査)および1月6日(同21日後、中発生、第2位~第11位本葉を調査)の3回、各区全株の設定調査葉位の発病を発病指数別に調査し、発病葉率ならびに発病度を算出した。また、薬害は適宜肉眼観察した。

発病指数: 0:無発病、 0.5:極わずかに発病が認められる、 1:病斑面積率が5%未満、 2:同 5%以上25%未満、

3:同 25%以上50%未満、 4:同 50%以上75%未満、 5:同 75%以上

発病度 = [Σ(程度別発病葉数 × 発病指数) × 100] ÷ (5 × 総調査葉数)

対象病害虫名 うどんこ病

試験場名 社団法人 日本植物防疫協会研究所宮崎試験場

3. 試験成績

被験物質名	希釈倍数	反復	試験開始7日後(12月23日)			試験開始14日後(12月30日)			試験開始21日後(1月6日)			薬害
			調査葉数	発病葉率	発病度	調査葉数	発病葉率	発病度	調査葉数	発病葉率	発病度	
緑茶	抽出原液	I	60	40.0	4.2	96	68.8	19.6	120	85.8	40.6	—
		II	60	15.0	1.7	96	53.1	9.7	120	77.5	26.3	—
		III	60	15.0	1.5	96	28.1	4.1	120	79.2	18.8	—
		平均	60	23.3	2.5	96	50.0	11.1	120	80.8	28.6	
		防除価		2.5	3.8		3.3	0		4.0	9.2	
モレスタン水和剤	3000倍	I	60	3.3	0.3	96	0	0	120	6.7	0.7	—
		II	60	0	0	96	0	0	120	0	0	—
		III	60	1.7	0.2	96	0	0	120	3.3	0.3	—
		平均	60	1.7	0.2	96	0	0	120	3.3	0.3	
		防除価		92.9	92.3		100	100		96.1	99.0	
カリグリーン水溶剤	1000倍	I	60	3.3	0.3	96	2.1	0.2	119	1.7	0.2	—
		II	60	1.7	0.2	96	2.1	0.2	120	1.7	0.2	—
		III	60	1.7	0.2	96	0	0	120	0.8	0.1	—
		平均	60	2.2	0.2	96	1.4	0.1	119.7	1.4	0.2	
		防除価		90.8	92.3		97.3	99.0		98.3	99.4	
無散布		I	60	40.0	4.5	96	58.3	16.3	120	86.7	40.2	
		II	60	20.0	2.2	96	54.2	9.3	120	85.8	27.0	
		III	60	11.7	1.2	96	42.7	5.9	120	80.0	27.3	
		平均	60	23.9	2.6	96	51.7	10.5	120	84.2	31.5	
		防除価										

4. 考察

12月16日、反復Ⅰの数株に対象病害の初発生を確認したことから試験を開始した。12月第5半旬までの発病は漸増状態であったが、その後、第6半旬には少発生から中発生、1月第1半旬には中発生と順次進展していった。試験期間を通して反復間での発病のばらつきを認め、反復Ⅰの発病程度が高く現れた。これは、初期発病は穏やかだが場所による発病ムラが生じやすい自然発病条件にて本試験が行われ、反復Ⅰ内が初発地点であったこと、また、施設出入り口と換気扇吸気口に隣接していたため、やや乾燥し易い条件にあったことによるものと推察された。

いずれの対照薬剤も試験期間を通して対象病害に対する卓効を呈した。このことから、本試験は化学農薬を用いた防除効果確認試験の範疇において、適期からの適切な条件での散布がなされたものと考えられた。

緑茶 抽出原液 茎葉散布

対象病害初発生確認時から2日間隔にて合計11回の散布を行い、4回散布翌日(12月23日)、7回散布2日後(30日)、11回散布翌日(1月6日)の合計3回の発病調査を行った。その結果、いずれの発病調査時にも対象病害に対する極わずかな防除効果を認めたが、これらは発病誤差の範疇に含まれるものと考えられた。よって、本試験では緑茶抽出液散布によるキュウリうどんこ病に対する実用的な防除効果は認められなかったと判断した。

緑茶抽出液散布によるキュウリ(品種:翠星節成2号)に対する薬害は、試験期間を通して認められなかった。